物語の「逍遥」

――『伊勢物語』六十七段から『源氏物語』へ――

谷口孝介

一、はじめに

かぐや姫が自己の素姓を翁たちにはじめて明かす長い告白のなかに、月の世界と人間世界との差をきわだたす、次のような発話がある。

月の都の人にて父母あり。かた時のあひだとて、かの国よりまうでこしかども、かく此くにには、あまたの年をへぬるになんありける。かのくにの父母のこともおぼえず。こゝには、かく久しくあそび聞えて、ならひ奉れり。

異界と人間世界との時間の流れの差をいうのに、つねに引かれるところである。その世界の差をいうのにあたって、いま一つ注目しておきたいのが、かぐや姫が人間世界に「久しくあそび聞え」たといっていることである。この「あそぶ」については、はやく山岸徳平・田口庸一の両氏が、『丹後国風土記』逸文の「于レ時嶼子遺二旧俗一、遊二仙都一、既逕二三歳一」という表現に注目し、「かぐや姫が故郷である月の都を離れて異郷の地である地上世界に暫時滞在していることをさして『あそぶ』と言った[1]」と注している。それをうけて、野口元大氏は「『遊ぶ』は、日常世界から脱出して別世界において存分に身心を解放するのが原義。『きこえ』は翁への敬意の表現であるから、姫は月世界の原郷から人間世界に遊び、翁は貧窮の現実から夢のような果報にあずかり、共に非日常の世界に遊ぶ意と解すべきか[2]」と、『竹取物語』を貫く主題系の鍵語として、この「あそぶ」を捉えるのである。このように異界淹留をいうのに、ここでは「あそぶ」という和語が用いられているのである。片桐洋一氏はここでこれらの注釈を踏まえながらも、「『日本書紀』の古訓は『逍遥』を『アソビ』と読む。この人間世界へ来たのも、天人としては

『かた時』の『逍遥』なのである[3]」と、この箇所の和語「あそぶ」を漢語「逍遥」の翻訳語とみる注目すべき見解を示す。上代文献においては「あそぶ」はいうまでもなく「遊（游）」で表記されることが、常態であったことから、片桐氏がここで「あそぶ」の背景に「逍遥」という漢語を持ちだしてきたことの意味は深い。

上代文献の「あそぶ」の用語例を精査した犬塚旦氏は、「あそぶ」の古義を漁猟・管絃舞楽であるとしたうえで、平安朝への語史的展開を次のように述べる。

上代において「あそび」の一分野でしかなかった音楽を奏するといったふうの用い方が王朝に至って、中枢的位置を占めるに至り、その女流文学に最も顕著に看取される現象を興味深く感ずるものである[4]。

このように平安朝に至って、「あそぶ」の語義が音楽に集中していったことによって、本来「あそぶ」が含有していた語義の一部を、「逍遥」という語が担うことになったのではなかろうか。『竹取物語』の例は、「あそぶ」の古義をよく保存したものであって、片桐氏はその点にかかわって、漢語「逍遥」をその背後に読み取ったのであった。

犬塚氏には触れるところがなかったが、『日本書紀』古訓においては「アソビ」と訓まれることもあった「逍遥」の上代から平安初期に至る漢文脈での用例は次のようなものである。

① 願与二皇子一、孟冬作陰之月、寒風粛殺之晨、将下逍二遥於郊野一、聊娯レ情以騁射上。（日本書紀・雄略天皇即位前紀）

② 語臣猪麻呂之女子、逍二遥伴埼一、邂逅遇二和爾一、所レ賊不レ切。（出雲国風土記・意宇郡・安来郷）

③ 余以暫往二松浦之県一逍遥、聊臨二玉嶋之潭一遊覧、忽値二釣レ魚女子等一也。（萬葉集・巻五、遊二於松浦河一序）

④ 思下欲無位無号詣二山水一而逍遥、無事無為玩二琴書一以澹泊。（続日本後紀・承和九年七月十五日条、嵯峨上皇の遺詔）

⑤ 若教三天下知二交意一、真実逍遥独此秋。（菅家文草・二、山家晩秋）

⑤は詩であるのでいうまでもないが、一見してすぐに気付くことは、③④の対句をはじめとして、いずれもひじょうに修辞的な文脈での使用であることである。ことに注目されるのは①である。①はこの直前に「遊二郊野一」とあるのをうけて、天皇の詞として表記されている箇所である。ここについては小島憲之氏によって、魏の応瑒「馳射賦」（芸文類聚・産業部下・田猟）に「将下逍二遥於郊野一、聊娯中遊於騁射上」とあるのが典拠であると指摘されている[5]。とすると雄略紀述作者は地の文においては常語の「遊」を用いたうえで、天皇の詞については、賦に拠るきわめて荘重な表現を意図したので

はなかろうか。そのような荘重な表現として「逍遥」が用いられているのである。③についても小島氏によって、「暫」「聊」「忽」の三助字が互訓であることが指摘されており、いずれもタマタマ、偶然ニ、ユクリナクの訓をもつという。[6] これらの助字を配置した定型的な文形式によって、偶然に異界に参入して異人と遭遇することが述べられるのである。ここでの「逍遥」もレトリカルな文脈における使用といえよう。②はこのなかではもっとも平易な文脈であるが、「邂逅遇」の措辞から、③のような文形式の変形と考えられる。この場合、対象が異界とも異人ともいえないが、「和爾」をそれに準じたものとして表現しようとしているのであろう。修辞的な文章の少ない『出雲国風土記』にあっては、ここは珍しく修辞的に表現しようとした箇所であろう。

上代から平安初期に漢文脈において用いられた「逍遥」は、常語の「遊」に対して、修辞的で、何らかの特殊な表現意図が存する箇所で使用されていることが分かった。

二、『伊勢物語』六十七段の「逍遥」

上代の漢文脈において特殊な表現意図をもって用いられていた「逍遥」が、平安朝の和文脈において初めて現れるのが、『古今集』一七〇番歌詞書を除けば、次に見る『伊勢物語』六十七段である。

ここではこの特殊な漢語「逍遥」を物語にとりこんだ『伊勢物語』の意図を考えておきたい。六十七段は前後の六十六段・六十八段と一つのまとまりをみせ、男の摂津・和泉への空間移動を扱った章段群とみられる。まずこの三段を掲げる。

むかし、をとこ、つのくにに、しる所ありけるに、あに、おとと、友だちひきゐて、なにはの方にいきけり。なぎさを見れば、ふねどものあるを見て、

なにはつをけさこそみつのうらごとにこれやこの世をうみわたるふね

これをあはれがりて、人々かへりけり。（六十六段）

むかし、をとこ、せうえうしに、思ふどちかいつらねて、いづみのくにへ、きさらぎばかりにいきけり。河内のくに、いこまの山を見れば、くもりみ、はれみ、たちゐるくもやまず。あしたよりくもりて、ひるはれたり。ゆきいとしろう木のすゑにふりたり。それを見て、かのゆく人のなかに、ただひとりよみける。

きのふけふくものたちまひかくろふは花のはやしをうしとなりけり（六十七段）

むかし、をとこ、いづみのくにへいきけり。すみよしのこほり、すみよしのさと、すみ吉のはまをゆくに、いとおもしろけ

れば、おりゐつゝゆく。ある人、「すみよしのはまとよめ」といふ。

雁なきて菊の花さく秋はあれど春のうみべにすみよしのはま

とよめりければ、みな人々よまずなりにけり。　（六十八段）

この三段を通じていえることは、「憂し」の心情によって支配されている章段群であることである。六十六段の歌の「うみわたる」は「海渡る」と「憂みわたる」との懸け詞であり、『後撰集』（雑三、一二四四）の同歌の詞書に「身のうれへ侍ける時、摂津の国にまかりて住み始め侍けるに」とあるのも参考になろう。片桐洋一氏はこの段と歌について、「俗世間を憂きものと観ずる姿勢」[7]がはっきりと見られることを述べている。六十八段についても歌の「うみべ」に「憂み」が懸けられているととる注釈[8]に従っておきたい。このように「憂し」の心情が支配するなかで「逍遥」という漢語が用いられているのである。「憂し」と「逍遥」との関連を示すものとして、『平中物語』（初段）の次の部分も考えあわされる。

この男はた宮仕へをば苦しきことにして、ただ逍遥をのみして、衛府司にて、宮仕へも仕うまつらずといふこといできて、官とらせたまへば、世の中も思ひ憂じて、憂き世には交らはで、ひたみちに行ひにつきて、野にも山にも交りなむと思ひつれど、

「逍遥」が「憂し」という心情に誘発されて、また「逍遥」することによってよりいっそう「憂し」の心情が確かめられるさまが物語られているのである。片桐洋一氏は『伊勢物語』の根本である「みやび」の思想をめぐって次のような発言をしている。

「古今集」成立の延喜五年（九〇五）以前から存し、その撰集資料にもなった原初形態の「伊勢物語」において、貴族の公的生活が「俗」の代表として、いわば「雅」を否定するものとして描かれていることに注意しなければならぬ。（中略）体制にかかわるすべてが「俗」であり、何物にもとらわれずに一切を棄てて自由に生きることだけが「雅」であり、「俗」を逃れて「雅」に生きたいとする価値観が、先の「逍遥」の場合と同じく、ここにおいても作品を統括していることを知るのである。[9]

このような反俗の文学としての『伊勢物語』にあって、六十七段で漢語「逍遥」をあえて和文脈において用いた語り手は、物語の方法を示す鍵語としてこの語を用いたとは考えられないだろうか。とするとなぜ和語「あそぶ」ではなく、漢語「逍遥」なのであろうか。それはこの「逍遥」という語のある内示性が、この物語の方法である反俗にまさしく呼応するものと考えられたためであろう。

ここで『伊勢物語』の方法と呼応する「逍遥」の内示性を探るために、「逍遥」の中国における六朝あたりまでの語誌をたどってお

こう。

「逍遥」の原義が最もよく分かるのは、『毛詩』（鄭風・清人）の「二矛重喬、河上乎逍遥」であろう。吉川幸次郎氏はこの「逍遥」について、「同母音をつらねた擬態語。やはり自由な行動をいうのに用いる⑩」と注しており、元来は様態を表す畳韻語であることが分かる。ついでこの語に思想的な意味をもたらしたのは、いうまでもなく『荘子』であろう。内篇の第一篇「逍遥遊篇」において雄大な規模で語られる大鵬のイメージは、まさに思想としての「逍遥」の具現化なのである。用語例としては内篇「大宗師篇」の「芒然彷徨乎塵垢之外、逍遥乎無為之業」などが典型的なものであり、唐の成玄英の疏に「芒然、無知之貌也。彷徨逍遥、皆自得逸予之名也」とあるように、対句の「彷徨」とともに気ままにたのしむことをいうのである。

『楚辞』には多くの例が見える。ことに『文選』にも収める次の二例は注目すべきものである。王逸の注とともに掲げておく。

時不可兮再得、聊逍遥兮容与。
（屈原、九歌四首・湘君、文選・巻三十二）

逍遥、遊戯也。言、天時不再至人、年不再盛已既老矣。不遇於時聊且逍遥而遊、容与而戯、以待天命之至也。
（王逸注）

時不可兮驟得、聊逍遥兮容与。
（屈原、九歌四首・湘夫人、文選・巻三十二）

驟、数也。言、富貴有命、天時難値、不可数得、聊且遊戯以尽年寿也。
（王逸注）

表面的にはそれぞれ男女二神が相逢えない嘆きを歌った長詩の結聯であるが、王逸注にあるように、いずれも賢君にめぐりあえない憂いを寓意したものと解釈されている。この解釈がはたして屈原の意図にかなっているかどうかはいまおくとして、このようにして解釈されてきた伝統を重視したい。不遇な時に天命が至るのを待つあいだに、しばらく「逍遥」するのである。ここでは『毛詩』の原義、『荘子』の思想性をももちろん含みこみながら、より政治的有価値的に用いられているのである。後漢の張衡「四愁詩四首・其一」（文選・巻二十九）の「路遠莫致倚逍遥、何為懐憂心煩労」も『楚辞』の用法をうけたものである。理想的な君主に近侍することができない不遇を詠む詩の結聯である。この詩は四連作で、其一の「逍遥」の位置に、「惆悵」（其二）・「踟躕」（其三）・「増歎」（其四）と嘆き悲しむさまをいう語が布置されている。また其四を除いて畳韻・双声語である点も一致する。このことからも「逍遥」がどのようなコノテーションをもって用いられているかが知られるのである。このような『楚辞』の系列の用法の政治性が希薄になったも

のが、晉の張華「雑詩二首・其一」（玉台新詠・巻二）の「逍遥遊二春空一、容二与緑池阿一」などという例である。旅に出た夫を思う妻の心を詠む閨怨詩における用例である。「容与」との対になっていることからも『楚辞』の影響を感じるが、もちろんここには政治的な寓意性はなく、ただ憂愁の思いに触発されての「逍遥」が歌われている。

『荘子』の思想と儒教的な聖人観が融合し理想的な聖君主の精神としていわれる場合もある。『淮南子』（脩務訓）の「以逍二遥彷佯於塵埃之外一、超然独立、卓然離レ世、此聖人之所二以遊レ心」などがその例で、張衡「南都賦」（文選・巻四）の「聖皇之所二逍遥一、霊祇之所二保綏一」もその系列である。「南都賦」のこの箇所に対して李善は「聖皇、謂二光武一也。逍遥、謂二潛竜之日一。韓詩外伝曰、逍、遥也」と注しており、聖皇光武帝がかつて南都に居していたことをいう。『荘子』的理想をいうものはことに魏晉の間に多く、晉の潘岳「秋興賦」（文選・巻十三）に「逍二遥乎山川之阿一、放二曠乎人間之世一。優哉遊哉、聊以卒レ歳」とあるのなどはその典型的な例である。より道教的な用法としては、『抱朴子』（明レ本）の「夫道也者、逍二遥虹霓一、翺二翔丹霄一、鴻二崖六虚一、唯意所レ造」が挙げられる。道の体得者、つまり仙人の仙術を述べているところである。そのはるかな系譜に連なるものとして、白居易「昭徳王后挽歌詞18-1189」の「仙二去逍遥境一、詩留二窈窕章一」がある。これは昭徳皇后の死を「逍遥境に仙去す」といっているのである。

以上とりまとめてみると、擬態語としての原義から、『荘子』における思想化、『楚辞』における反俗的営為、聖君主の精神、仙人の行為としての用法などに分化していく様相がほぼ見わたされたと思う。では、『伊勢物語』はこれまでにみた漢語「逍遥」のどの系譜に連なるものであろうか。さきに引いた片桐氏の『伊勢物語』の根本についての発言や渡辺秀夫氏の「第九段の主人公は、『楚辞』に描かれた屈原の姿を下敷きにして結構されているとみることができる」[11]という指摘、さらには六十七段前後の「憂し」との関わりをも思いあわせてみると、『楚辞』における屈原の用法が強く影を落としていることはもはや贅言を要しないだろう。それはたんなる不満な現状からの逃避ではない、現状との厳しい対立を孕んだ士大夫の営為としての「逍遥」であると考えられるのである。その内示性を持たせるために語り手は、あえて上代の漢文脈においてきわめて限定的にしか用いられていなかった漢語「逍遥」を、和文脈の物語のなかに持ちこんだものと思われる。

三、「花のはやし」

『伊勢物語』六十七段を屈原の系譜を引く「逍遥」の文学の表象

と考える本稿にとって、じつは本段の歌「きのふけふ……」の「花のはやし」なる語が大きな意味を持ってくるのである。この歌全体については、石田穣二氏が「この歌、寓意があろうが、明らかでない」[12]というように何か解釈しきれないところが残る感がつきまとう。第三句「かくろふは」についても、雲が花の林を隠すと自動詞「かくろふ」を他動詞的に解釈する説、また山が雲によって隠れると新しい主語を補って解釈するものなどが有力である。これについては私は『伊勢物語愚見抄』の解釈によるのが素直だと考える。

かくろふは、かくるゝなり。歌の心は、いこま山に立まひし雲のはれたるをかくろふといふ。雲かくれたる也。花のはやしは、梢にふりたる雪の事也[13]。

つまり、歌の「たちまひかくろふ」は、物語本文の「くもりみ、はれみ」に呼応しており、物語本文でその景を総叙して「たちゐるくもやまず」といっているのに対応するのである。とすると「かくろふ」を自動詞として解釈したうえでも、上の句全体は、雲が出たり消えたりして、なかなかすっきりと晴れないさまを擬人的に表現したものと考えられるのである。いっぽう、「花のはやし」については、表面的には『愚見抄』のいうように、木の梢に降り積もった雪の比喩であることは確かであろう。それを「花のはやし」と表現することは独創的であるのではあるが、拠るところのありそうな表現である。そこで上野理氏の詩語「花林」を歌語化したものであるとする指摘[14]は示唆的である。「花林」の例で、「逍遥」との関連において注目したいものとして、次に掲げる北周の庾信の連作詩「詠画屏風」詩二十四首」がある[15]。いま関わる其五と其九とを並置しておく。

其五

逍遥遊桂苑、寂絶想桃源。
狭石分花逕、長橋映水門。
管声驚百鳥、人衣香一園。
定知歓未足、横琴坐樹根。

逍遥して桂苑に遊ぶ、寂絶として桃源を想う。
狭石　花逕を分け、長橋　水門に映る。
管声　百鳥を驚かし、人衣　一園に香る。
定めて知る　歓未だ足らざるを、横琴　樹根に坐す。

其九

徘徊出桂苑、徙倚就花林。
下橋先勧酒、跂石始調琴。
蒲低猶抱節、竹短未空心。

徘徊して桂苑を出で、徙倚(しい)して花林に就く。
橋を下りて先ず酒を勧め、石に跂ちて始めて琴を調ぶ。
蒲低くして猶節を抱くがごとく、

竹短くして未だ心を空しくせず。
絶愛猿声近、惟憐花径深。　絶愛す　猿声近きを、惟だ憐れぶ花径深きを。

其五の第二句「想」、第八句「樹」は、『庾子山集注』ではそれぞれ「到」、「石」に作るが、いま『芸文類聚』『文苑英華』所引本文に拠って改めた。

さて其五は、「桂苑」における「逍遥」のさまをいう。第二聯・第三聯の景物に触発されて「桃源」が想到されるのである。しかし琴が「樹根」にこともなげに置かれていることで、十分に歓を尽くしていないのが分かる、というのである。

其九は其五の結聯をうけて、その心情の解決を歌う。其九の首聯は其五の首聯の変奏である。「徘徊」「徙倚」はいずれも「逍遥」と同じくぶらぶらとさまようさまをいう。五で遊ばれた「桂苑」を九では出るのである。出て「花林」に到着し、その結果ようやく琴の演奏を行う。ということは「花林」に至ってやっと歓心が充足したというのである。其五、其九で繰り返し現れる「桂苑」は、宋の謝荘「月賦」（文選・巻十三）に「清二蘭路一、肅二桂苑一」とあり、その李善注に「劉淵林呉都賦注曰、呉有二桂林苑一」と見えるように、都内の整然とした苑林をいうのであろう。そこを出て到った「花林」とは、其五で呼応する「桃源」の具現化と考えるのである。この連詩においては、其五から其九へと主題は流出し、都内の苑林から「桃源」境たる「花林」への移行が詠まれており、とりもなおさずその移行こそが「逍遥」であると考えうるのである。

『伊勢物語』六十七段は、この庾信詩を世界として物語られたものである。その鍵語として「逍遥」「花のはやし」が布置されたと考えられる。「花林」と「雲」との関わりも、梁の武帝「遊二鍾山大愛敬寺一」に「朝日照二花林一、光風起二香山一。飛鳥発差池、出雲去連綿」とあるように、漢詩的発想といえよう。[16] 六十七段のこの歌に関して、上坂信男氏は次のような興味深い読みを提示する。

自然の雲・山・林を擬人化した発想であるが、裏の意味として、誰かが花の林にも喩えられる若い女を隠していると、まず当たり障りのない恋の情を感じさせ、ついで、雲を権力を独占する者の専横に准える。ただ、この後の意味は同行の「思ふどち」のように境遇思想を同じくする者にだけ分かればよいのだし、分かったものであろう。（中略）そのばあい、「花の林」が、執柄者から疎外されている同行者たちを喩えるのか、雲上に隔てられている皇室を指すのか断定しきれない。[17]

「花の林」が同行者や皇室を比喩しているとする考えにはにわかに従えないが、上坂氏が解読したこの歌の寓意の構図だけはうべなえるのではないか。つまりこの歌は、男が「逍遥」することによっ

て、到達しようとしている桃源境たる「花のはやし」が、「くも」の「うし」という心情によって隠蔽されてしまうという構図を持つのである。

四、「逍遥」の和語化

『伊勢物語』において方法的に和文脈にとりこまれた漢語「逍遥」は、そののち一定の傾向を示して用いられるようになる。

① おほんわりごまゐり、とりすこしとらせて、たまつしまにものし給ほど、所々おほむまうけしたる人おほかり。たまつしまにいり給て、そこにあそび、せうようし給て、かへり給とて、

（うつほ物語・ふきあげの上）

② 江口わたりの逍遥、このたびは、不用なめり。

（狭衣物語・巻一）

③ 大井に逍遥したるかたをかきて、鵜船に篝火ともしたるかたをかきて、

（栄花物語・月の宴）

④ ひとゝせ、入道殿の、大井河に逍遥せさせ給しに、

（大鏡・頼忠）

⑤ 惟成為二秀才雑色一之時、花逍遥ニ一条一種物シケリ。

（古事談・巻二）

⑥ 殿上ノ逍遥ハ、代ノ始ゴトニ必アル事也。鳥羽院ヨリ後タエニケリ。

（続古事談・巻二）

⑦ 誰偏謂二洛外之逍遥一、乃是楽二海内之清静一。

（源道済、初冬泛二大井河一詠二紅葉蘆花一和歌序、本朝文粋・巻十一）

⑧ 其ノ後、大王月来ヲ経テ他ノ所ニ御行シテ逍遥シ給フ事有リ。

（今昔物語集・巻四・第三）

⑤⑧を除いて、いずれも水辺における詩歌管絃をともなった舟遊びを指していうものである。もちろん水辺であることに、はるかに『荘子』の大海を漂うイメージや屈原の「漁父」の影が認められるのではあるが、しかしそれらの思想性はまったく払拭されてしまっている。⑥などは「逍遥」の恒例化・形骸化をいうものであって、『伊勢物語』で見てきた現状に対する厳しい対立とはもはや縁遠い存在である。ことは和文脈だけではなく、漢文脈においても同じである。⑦は和歌序という性格によるのかもしれないが、漢文脈においてあきらかに大井川の舟遊びを指していう例である。⑧の『今昔物語集』はこの間の「逍遥」がどのように用いられているかを示す好例である。この説話の出典と考えられている『法苑珠林』（巻三十七敬塔篇・引証部）の対応する箇所は「久久之後、王出行園」となっており、「逍遥」の語は見られないのである。『法苑珠林』が直接の典拠であるかどうかは慎重でなくてはならないが、おそらく

「逍遥」と表現されたのは和文脈に移し変えられた時点での所為であろう。ここに私は漢語「逍遥」の和語化、思想面よりいえば形骸化ともいうべき現象を見るのである。

五、『源氏物語』へ

『源氏物語』における六例の「逍遥」も次に掲げるように、いずれも前節で述べた和語化した「逍遥」である。

① そのころ、大弐はのぼりける。いかめしく類ひろく、娘がちにて、所狭かりければ、北の方は船にてのぼる。浦づたひに逍遥しつつ来るに、ほかよりもおもしろきわたりなれば、心とまるに、（須磨）

② 君は、難波のかたにわたりて御祓へしたまひて、住吉にも、たひらかにていろいろの願果たし申すべきよし、御使して申させたまふ。にはかに所狭うて、みづからはこのたびえまうでたまはず、ことなる御逍遥などなくて、急ぎ入りたまひぬ。（明石）

③ 御社立ちたまひて、所々に逍遥を尽くしたまふ。難波の御祓へなど、ことによそほしうつかうまつる。堀江のわたりを御覧じて、「今はた同じ難波なる」と、御心にもあらでうち誦じたまへるを、（澪標）

④ 道のままに、かひある逍遥遊びののしりたまへど、御心にはなほかかりておぼしやる。（澪標）

⑤ 詣でたまひし道は、ことごとしくて、わづらはしき神宝、さまざまに所狭げなりしを、帰さはよろづの逍遥を尽くしたまふ。言ひ続くるもうるさく、むつかしきことどもなれば。（若菜下）

⑥ 紅葉の盛りに、文など作らせたまはむとて、出で立ちたまひしを、かくこのわたりの御逍遥、便なき頃なれば、おぼしとまりてくちをしくなむ。（椎本）

①⑥を除けば、いずれも光源氏が住吉詣でするのに関わって用いられているものである。②に対して『岷江入楚』が「住吉へさへ参詣なけれはまして逍遥はし給はぬ也」と注しているのも住吉詣でと「逍遥」との関連を示すものであろう。これらの『源氏物語』の例と第二節で見た『伊勢物語』六十七段との異質性を鋭く嗅ぎとった書陵部本冷泉家流『伊勢物語抄』に次のような記述が見られる。

せうようしにとは、遊行なり。せうように二義有。一には逍遥（セウヨウ）。是はあそびの心也。二には碩用（シヤウヨウ）とかけり。此は祝の心。源氏には是をもちゆ[18]。

この「碩用」という文字はこのままでは解しにくいが、同じ基盤を持つ注釈書である毘沙門堂本『古今集注』（一七〇番歌）に「頌用」とあるのが正しい。荒唐無稽な説ではあるが、『源氏物語』のばあい、住吉詣でとの関連で「逍遥」が用いられていることに関し

ての発言であろう。

それでは『源氏物語』には『伊勢物語』で見た物語の方法としての「逍遥」の系譜は受け継がれていないのであろうか。私はやはり『源氏物語』の「逍遥」が住吉詣でと関連して用いられていることに注目したいと思う。『源氏物語』の住吉詣ではいうまでもなく光源氏の須磨明石遷居に因由を持つ。その須磨行の途中は次のように語られている。

かりそめの道にても、かかる旅をならひたまはぬここちに、心細さもをかしさもめづらかなり。大江殿と言ひける所は、いたう荒れて、松ばかりぞしるしなる。

唐国に名を残しける人よりもゆくへ知られぬ家居をやせむ　（須磨）

光源氏の須磨行での唯一の途中詠である。それが「大江殿」という地で詠まれていることの意味は不可解である。「大江殿」については『花鳥余情』以来、伊勢斎宮帰京のおりの頓宮の所在地で「大江の儲所」とも呼ばれていたことが説かれている。近年、小林茂美氏はこの斎宮頓宮説を踏まえつつも、詳細な史料の分析を加えて、「大江殿」が〈死と復活〉の象徴的意義を担った表現空間であることを論じた。[19] 物語と範列関係にある歴史伝承をあざやかに提示した論といえよう。私は小林氏の論に触発されつつ、さらに『伊勢物語』六十七段の「逍遥」をもそのパラディグムであると考えるのである。そのさい思考の跳躍台になるのが、『紫明抄』に注する『後拾遺集』（羈旅、五一二）の次の歌である。

つのくににくだりてはべりけるに、旅宿遠望心をよみ侍ける　良暹法師

わたのべやおほえのきしにやどりしてくもゐにみゆるいこま山かな

この良暹歌は、『八雲御抄』（巻五・名所部・岸）に「おほえの（一後）。良暹歌に、雲井にみゆるいこま山。わたなべやといへり。」とあるのをはじめとして、『歌枕名寄』（畿内部・摂津国・雑篇）では「渡辺大江岸」の項を立てて、その項目の劈頭に置かれており、「おほえ」の歌枕化の創始と考えてよいだろう。良暹は旅心を詠ずるにあたって、西から振り返る生駒山という着想を、『萬葉集』（巻二十、四三八〇）の防人歌「難波津を漕ぎ出て見れば神さぶる生駒高嶺に雲そたなびく」に得て、『伊勢物語』六十七段を念頭に置きつつ、「旅宿遠望」の起点を「おほえのきし」に据えて、新しい歌枕を作り出したのではないか。この歌が『伊勢物語』を踏まえていることは、『伊勢物語肖聞抄』の次の指摘からもうかがえよう。

伊駒の山、おもしろき山也。良暹法師　わたのべや大江の岸にやどりして雲井に見ゆる伊駒山哉　と読るも、此心にて分別す

べし。[20]

『伊勢物語』の摂津・和泉逍遥と『源氏物語』須磨行は、良暹歌を介して映発しあう。そのさい「大江殿」は『伊勢物語』の「逍遥」の記憶として刻印された磁場なのである。光源氏、唯一の途中詠「唐国に……」に屈原が詠みこまれていることはほぼ定説化している。この詠を引き出すのが「逍遥」の記憶としての「大江殿」だったのではあるまいか。

注

① 山岸徳平氏・田口庸一氏『最新国文解釈叢書　竹取物語』（法文社、一九五四年）一八〇頁。

② 野口元大氏校注『新潮日本古典集成　竹取物語』（新潮社、一九七九年）七二頁。

③ 片桐洋一氏他校注・訳『完訳日本の古典　竹取物語・伊勢物語・土佐日記』（小学館、一九八三年）四九頁。

④ 犬塚旦氏『王朝美的語詞の研究』（笠間書院、一九七三年）二八八頁。

⑤ 小島憲之氏補注『書紀集解　三』（臨川書店、一九六九年）八〇五頁。

⑥ 小島憲之氏『上代日本文学と中国文学　中』（塙書房、一九六四年）一〇二七～一〇三三頁。

⑦ 片桐洋一氏編『鑑賞日本古典文学　伊勢物語・大和物語』（角川書店、一九七五年）一五八頁。

⑧ 片桐洋一氏校注『校注古典叢書　伊勢物語』（明治書院、一九七一年）六三頁。

⑨ 片桐洋一氏『伊勢物語の新研究』（明治書院、一九八七年）六頁。

⑩ 吉川幸次郎氏注『中国詩人選集　詩経国風　下』（岩波書店、一九五八年）五五頁。

⑪ 渡辺秀夫氏『平安朝文学と漢文世界』（勉誠社、一九九一年）五〇〇頁。

⑫ 石田穣二氏訳注『新版　伊勢物語』（角川書店、一九七九年）六五頁。

⑬ 片桐洋一氏『伊勢物語の研究〔資料篇〕』（明治書院、一九六九年）五五二頁。

⑭ 上野理氏「伊勢物語と海彼の文学」『国文学』24巻1号、一九七九年。

⑮ 小島憲之氏『上代日本文学と中国文学　上』（塙書房、一九六二年）一〇九頁で、庾信の別集が上代において伝来していたことが論じられている。また唐代における庾信の作品の流行と上代文学との関わりについては、東野治之氏『遣唐使と正倉院』（岩波書店、一九九二年）三二一～三二六頁を参照。

⑯ 中唐の盧綸「春日題二杜叟山下別業一」に「雲影断来峯影出、林花落尽草花生」とあり、何玄「聴レ箏」（千載佳句・箏）にも「一望白雲千万断、箏声日暮出二花林一」と見える。

⑰ 上坂信男氏『伊勢物語評解』（有精堂、一九六九年）一九二頁。

⑱ 片桐氏、前掲注⑬書、三六一頁。

⑲ 小林茂美氏「源氏物語の表現機構―須磨巻『大江殿の松』が内発するもの―」『國學院大学大学院紀要文学研究科』21輯、一九九〇年。

⑳ 片桐氏、前掲注⑬書、六二六頁。